

動物園の愉たのしみ

並木 美砂子

私たち人間は、遠い昔から動物との深い関係をつくってきました。動物園の歴史も千年以上ありますが、はじめは支配者の権力の象徴として誕生しました。猛獣や珍しい動物を集めていたのです。そして、それを見ることのできたのも、特権階級に限られていました。

いろいろな動物を見やすく展示し、誰にでも楽しんでもらうという、私たちに馴染み深い「動物園」

は、わずか二百年くらい、日本では百年あまりの歴史しかありません。

では、いったい私たちは動物の何に惹かれているのでしょうか。なぜ、動物園に足を運ぶのでしょうか。

豊かなコミュニケーション

子ども動物園に、ようやくカピバラの赤ちゃんが誕生しました。お天気の良い日は家族連れや遠足の

子どもたちで、カピバラ池のまわりは人垣ができるほどです。どんな動物も、やはり赤ちゃんは人の目を楽しませる器量を備えているものです。ちょっとお客さんの様子をカピバラ小屋の中からのぞいてみましょう。

「あかちゃんだって。ママ、あかちゃんだって」

「そうね。あかちゃんね」

「何してるの？ あかちゃんたち」

「何だろうね。遊んでるんじゃない？」

「ほら、こっち向いたよ。こっち来るよ。こっちおいで」

こんなふうに、自分で赤ちゃんがいることに気づいてくれるのは、やはり五、六歳以上の子どもたちようです。三、四歳の小さな子は、だれか大人が働きかけて、初めてわかる場合が多いようです。

「ほら、見てごらん」

「……」

「あそこ、あそこ。見えるかな。小さなかわいいあ



▲写真1 水あび大好き「カピバラ」

「かちゃん」

「どこ？」

「ほうら、ね。○○ちゃんとおんなじね。いい子、いい子してもらってるよ」

「いい子、いい子？」（自分の頭を自分で撫でる）

「あら、おっぱいたくさんね」（カビバラには、全部で十個も乳首があります）

このように、動物園ならではのほほえましい光景が、動物の親子のまわりには見られるものです。

ですから、動物園の持つ魅力のひとつを、私は「人間どうしのコミュニケーションがはかられること」とだと思います。親子であれ、友達どうしであれ、時には知らない人どうしであっても、動物たちの見せるさまざまなしぐさは、人間どうしの会話をはずませます。

動物園へ足を運べば、きつとどこかで動物の赤ちゃんや親子に出会えるものです。彼らのしぐさは、見に来た人の心を和ませ、コミュニケーション

のきっかけになっているはずですよ。

また、とくに赤ちゃん動物がいなくても、魅力的な動物はたくさんいます。あたたかな日だまりの中で、半分目を閉じてゆっくり反芻しているヒツジたち。よく見ていると、おなかの方からのどを通して、食べた草のかたまりがぐぐっと口にもどっていくのがわかります。近づくと、草を噛み直している音まで聞こえます。

「かみかみ、してるんだよ」

「ようく、かみかみね。ヒツジさん、えらいね」

「○○ちゃんも、じょうずにかみかみできまじゆか？」

時々、赤ちゃんことばも入れながら、おかあさんたちは自分の子どもに話しかけます。そして、よその子どもがヒツジに触れているのを見ると、

「○○ちゃんも触ってごらん」と、手をそえて触らせようとします。

「うちの子、イヌでもネコでもへっちゃら。なんで

も触らないと気にいらないうみたくいで」

「うちの子は、だめなんですよ。だれかと一緒にじゃないと」

「でも、いったん動物みつけると、そこからなかなか離れないんで、困っちゃうわ」

ほら、こんな風に、知らない親どうしも、動物をはさんでちょっと仲良しになるのです。

どんな動物園であっても、今、ここにご紹介した光景は共通であり、そこにこそ、動物園の愉しさの秘密が隠されていると思います。

動物、子ども、先生、そして私たち

さて、最近の動物園では、ウサギやモルモットといった小動物を、遠足で来た幼稚園や保育園の幼児のために準備しているところがよくあります。ある時間帯、その園のために場所を確保し、動物を用意するので、その事前のうちあわせもします。うちあわせの内容は動物園によっていろいろですが、私た



▲写真2 フタコブラクダはお口もぐもぐ、いつももぐもぐ

ちの子ども動物園の場合、動物の種類や活動内容、教材（紙芝居や写真）の貸出しなどを予約カードに記入し、当日の活動の流れを先生がたに理解してもらうことにしています。実際に使う動物に触れてもらい、動物のツメや歯がどうなっているのか、また、どんな接し方が動物と子ども双方に安全かを確かめていただくのです。

「わあ、かわいい。ひさしぶり。ウサギだっこするのは、先生がたも大喜び。

「あ、なるべくおなかを上にもけないで、自分の方に向けたほうがいいですよ。意外に足の力があるので、しっかり、おしりを支えて持ってください。そのほうが動物も安心しますから」

「ええっ。これ（ハツカネズミ）、さわるんですか？ わたし、苦手なの」

「でも、子どもには人気動物ナンバーワンですよ」

「だけど、ほら。しっぽに毛がはえてないでしょ。気持ち悪くて」

「じゃ、この布に乗せてから、手に乗せてみたらどうでしょう」

「かわいい子たちのためだもの、はい、やってみます」……

若い女の先生がたには、カメやカエル、小さなネズミはあまり人気がありません。でも、使う動物の種類を決める時、子どもたちの反応を教えてあげると、やはりそこはプロ意識があるためでしょう。「子どもたちのため」というその一点で、自分も苦手動物に挑戦してくれませう。

いったん、体験するともう大丈夫です。遠足の当日も、私たち係といっしょに、園児たちに動物のことを教えてくれたり、カメを触ってみせてくれたり、本当に一生懸命です。「子どもたちのため」の一言は、先生がたの気持ちを変えてくれる魔法の杖のようなものですね。

動物と、子どもと、先生と、そして私たち動物園の係と。そこには何か「教える者」「教えられる

者」、あるいは「あなたがお客さん」で「私が店番」といった関係はなくなります。動物を仲立ちとした、コミュニケーションの場となります。緊張し切った子ども、走ってウサギを追いかけ回す子ども、もくもくと餌をあげ続ける子ども、じーっとネズミの眼をみつめている子ども。実に個性の現れる場となります。

「へー、○○ちゃんて、意外に動物だめなんだ。いつもははしゃいでるのよね」

「○○ちゃんはやっぱり好きなんだね。園でもいつもチャボ小屋の前にいるもんね」

子どもたちの見せる意外な一面に、先生たちの会話ははずむようです。

無理やりモルモットの口にニンジンを押し込もうとしている園児の姿を見て、

「私たちの給食指導、そのものね、こう、そっとつぶやいた先生もいました。

確かに、子どもがどのように動物とかかわるかは



▲写真3 この布があるとウサギのツメも痛くないもん

その子の内面を微妙に映し出ししてくれる鏡のようなものです。そして、その鏡を磨けるかどうかは、私たち大人の気持ちにかかっているのだと思います。

「このころの」ビデオ事情

こうして、子どもたちと動物たち、そして私たち大人とのかかわりあいを考えてみて、最近気になることがあります。ハンディなビデオカメラの普及率は年々高くなり、かわいい自分のお子さんの姿を収めるべく、たくさんのお客さんがビデオカメラ片手に動物園を訪れます。

「パパー、これくすぐったいよ」

「ねえ、おてて、なめられちゃったよ」

「どうしてヤギさんのうんち、まるいの？」

「このカメラさん、いつ寝るの？」……

次々にいろいろ話かけてくれる子どもたちの声をよそに、必死にいいアングルでその子を撮ろうとする大人たち。この時、大人はレンズ越しに子どもと

接しているのです。

ひどい時は、小さなネズミが手から洋服の間にはいつてしまい、パニックになっている自分の子どもを、「いい場面だから」といって、ビデオを撮り続けているご両親もいます。そのときの子どもの気持ちはどうでしょう。レンズのむこうの大人と、どうやってコミュニケーションができるでしょうか。同じ目線で共通の世界をもつ時に、本当に子どもの気持ちや気分がわかるのではないかな、と思います。

いろいろ思いつくまま筆を走らせました。動物園の周辺には、まだまだたくさん話題がありそうです。せっかくの楽しさいっぱい動物園です。本当に愉しむ術を、お互いに考えていきたいものですね。

(千葉市動物公園飼育係)